

図書館だより

10月号 丹原高校図書委員会

○10月27日～11月9日は読書週間です！！

読書の秋ですね。10月27日からは読書週間が始まります。皆さんは読書週間の歴史をご存知ですか？

終戦まもない1947年(昭和22)年、まだ戦火の傷痕が至るところに残っているなかで「読書の力によって、平和な文化国家を作ろう」という決意のもと、出版社・取次会社・書店と公共図書館、そして新聞・放送のマスコミ機関も加わって、11月17日から、第1回『読書週間』が開催されました。そのときの反響はすばらしく、翌年の第2回からは期間も10月27日～11月9日(文化の日を中心にした2週間)と定められ、この運動は全国に広がっていきました。

そして『読書週間』は、日本の国民的行事として定着し、日本は世界有数の「本を読む国民の国」になりました。

いま、電子メディアの発達によって、世界の情報伝達の流れは、大きく変容しようとしています。しかし、その使い手が人間であるかぎり、その本体の人間性を育て、かたちづくるのに、「本」が重要な役割を果たすことは変わりありません。暮らしのスタイルに、人生設計のなかに、新しい感覚での「本とのつきあい方」をとりいれていきませんか。



2019 読書週間ポスター

*ちなみに、一般募集で、採用されると、賞金10万円！

図書館利用状況 (クラス別貸出冊数)

2019. 10. 24. 現在

	1組	2組	3組	4組
1年	16	24	28	41
2年	30	1	3	24
3年	29	8	0	

ある一定の方がよく図書館を利用いただいております。食後に、10分間静かに読書とかいかがですか？
もっと、図書館においでくださいませ♡

(今回の図書館だよりを担当した3-2)

図書委員2人のおすすめ本



『すべてがFになる』 森博嗣

研究者の犀川創平は、ある日自身の研究室のメンバーと、犀川の恩師の娘の西之園萌絵とともに、愛知県の妃真加島(ひまかじま)へ向かいました。そこには優秀な研究者が集まる真賀田研究所があります。しかし、研究所のトップであり天才研究者の女性・真賀田四季博士と思われる人物が死体となって発見されるのです。その死にざまはとても奇妙なもので……。

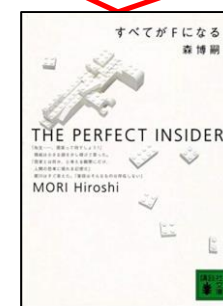
読んだ後も心に残るストーリーです。あまり本を読まない人でも、楽しめると思います。どこの書店にも比較的置いてあります。見かけた際は、ぜひ手に取ってみてください。



『青くて痛くて脆い』 住野よる

大学一年生の田端楓は、自分とは正反対の性格の秋好寿乃に出会い親友になり、「モアイ」という秘密結社を立ち上げ活動し始めますが…。それから3年の月日がたち「秋好はもうこの世にはいない」という楓。いったい二人の間に何があったのでしょうか。

この本は誰にでもある人間関係の悩みや葛藤を書いています。とても面白く読みやすいので、是非読んでみてください。



昨年度末に転勤された渡部栄子先生からのお薦め♡

『さよなら 田中さん』
『14歳、明日の時間割』

鈴木 るりか 著

作者は何と中学生。小学館が主催する『12歳の文学賞』に小学4・5・6年の時、3年連続で大賞を受賞。るりかさんが小説を書くようになったきっかけは、賞品の図書カードで大好きなマンガを買いたかったかららしい。



図書館にあります。
どうぞ、気軽に手にとって見てください♡

『「非認知能力」の育て方』

ボーク重子 著

長い間「学力偏重主義」に陥り、問題解決力やコミュニケーション力に欠け、心が折れやすい子どもが増えているといわれる日本。「人間力を育む教育」がされてこなかったことが原因だともいわれている。

近い将来、AIが多くの仕事を奪うと言われている今、数値化できる能力＝学力テスト、IQなどは意味を持たない。人だけが持ち得る人間力＝「非認知能力」を育てることこそが、これからの教育に必要なこと。2020年教育改革の核もそこにある。

世界に先駆けてこの教育改革を断行したアメリカで子育てをした日本人ママ、ボーク重子さん。娘スカイは、2017年「知力・表現力・コミュニケーション力」などを競う「全米最優秀女子高生コンテスト」で優勝を果たした。子育てを始めたワシントンDCで著者が見た現地の教育は、日本人からすると信じられないものだった。しかし、それこそが子どもの強い心を育み、自分で様々な問題を解決する力をつける教育であることを知る。

そして、彼女は娘が持つ可能性を伸ばしていくために、家庭でできる5つのことに気がついた。それこそが、「非認知能力」を育てる鍵であり、子育てをする親をも幸せにするルールだった。